様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５３１２０８

研究課題名（和文）日中韓の相互理解の推進を用いる教員養成プログラムに関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical Study on teacher training program used to promote mutual understanding of Japan, China and South Korea

研究代表者
全　炳徳（JUN, Byungdug）

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号：１０２６４２０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は日中韓の大学生同士の相互理解を深めるとともに，教員養成分野における新たな教育プログラムの開発・確立を目指すものであった．平成20年度からスタートした日中韓の教員養成段階における海外での教育実習を，国際理解教育分野の具体的な形としてカリキュラム化することを目標としていた．平成24年度からスタートした本研究は27年度までの4年間，国際理解教育と演習科目を開設（日本・長崎大学と韓国・漢陽大学校）と運用に関わることができた．

研究成果の概要（英文）：This study is about multi cultural and international understanding between the university students of Japan, China and South Korea. It aimed at the development and establishment of new education programs in teacher training field throughout this study. Original of this program was started in 2008. A new curriculum was created as a teaching practice in foreign countries through this project. In this study, a newly started program from 2012 to 2015 was opened and exercised with the course of multi cultural and international understanding(Nagasaki University of Japan and Hanyang University of Korea).

研究分野：教育科学

キーワード：日中韓　国際理解教育　共修プログラム

１．研究開始当初の背景

2003 年 10 月，長崎大学と韓国・漢陽大学校との大学間交流協定が締結され，時期を同じくして中国・東北師範大学とも大学間交流協定が締結された。そして，2004 年 7 月 1 日から 10 日までの間，日中韓の交流授業の試みが「第 1 回目の I-STEP (International Student Teaching Education Program)」として，長崎大学で開催された。当時はまだ，交流プログラムの名称が決まっておらず，次の年の 2005 年の韓国・ソウルで開催された第 2 回目のプログラムから I-STEP という名称が使用された。その後，隔年ごとに日韓で開催された。

２．研究の目的

本研究の目的は日中韓の大学生同士の相互理解を深めるとともに，教員養成分野における新たな教育プログラムの開発・確立を目指すものであった。科研費の支援を受けながら本格的に実施し始めたのは平成 24 年度からであり，日中韓の教員養成段階における海外での教育実習を，国際理解教育分野の具体的な形としてカリキュラム化することができた。そして今年度の 2015 年，2 回連続の I-STEP が韓国・漢陽大学校と長崎大学で開催され，合計 14 回の実施となった。

本研究がスタートしては合計 5 回の実施をすることができた。

３．研究の方法

平成 24 年度からスタートした本研究は日中韓のそれぞれの国を訪問しながら，相手国の学校現場で教員養成の課程で学ぶ学生達が海外実習を行うことを主な研究方法とした。残念ながら，中国に関しては国レベルの環境の違いを克服できず，同じ土俵上での教育環境づくりが実現できなかった。これは日中韓の教育環境の現状を示すものであると見ている。

日韓の間では，平成 24 年度から平成 27 年度までの 4 年間，それぞれの国の大学において「国際理解教育」と「演習科目」を開設することができた（日本・長崎大学，韓国：漢陽大学校）。

本研究を進める期間中，長崎大学では延べ 80 名の学生たちが海外に派遣され，海外での交流授業と教員養成のための教育実習を経験することができた。

４．研究成果

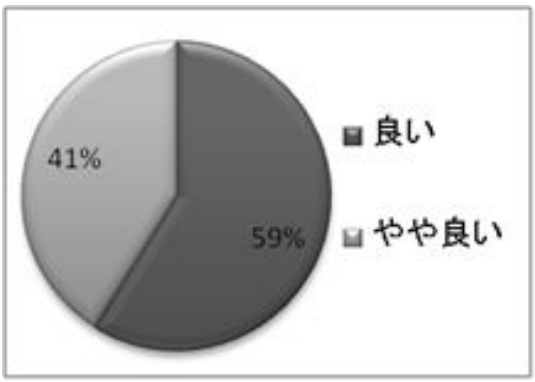
本研究の研究成果は主に，報告書の形で出版されており，学術論文や卒論，または学会の発表論文としても公表された。ここでは，その一部を「結果１」として紹介する。

【結果１】

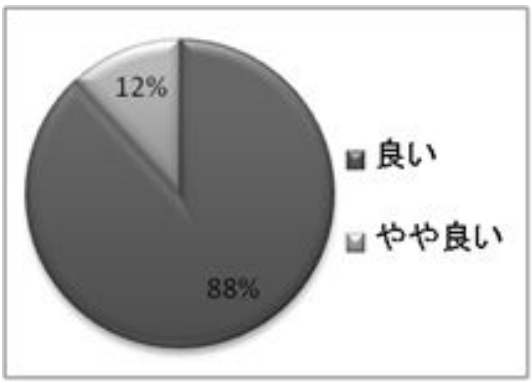
平成 24 年度の本研究の実施は長崎大学を会場に行われた。参加者へのアンケート調査が実施され，その内容は①I-STEP そのもの，②参加国の人への印象，③参加者本人の感想，④日韓関係，等についてであった。

まず，I-STEP は基本的に複数回参加が義務付けられている。それは受け入れ時には相手国の参加者を面倒見ながら交流を深め，相手国の I-STEP のプログラムに参加することを狙いとしているためである。その意味で，I-STEP への参加者は初めての人が少なく，2 回目の参加者が 70 パーセントを超している。I-STEP は一回の行事として終わるプログラムではなく，両国の教育学部の教育課程の一部として，海外教育実習の一環としての色合いが強いことが分かる。

また，参加国と人への印象である。日本の学生からして韓国の印象，韓国の学生からして日本の印象はどのような印象を持っているのか。



(a)国への印象



(b)人への印象

図１　参加国の国・人への印象についての回答

図１は，国そのものについての印象について(a)また，人への印象について(b)それぞれの結果を表している。両国の学生たちは国に対する良い印象より，人への良い印象が強いことがうかがえる。

また，参加者本人の印象については，アンケートとして「(a)あなたは日本（韓国）に興味がありますか。」または，「(b)あなたは今まで，I-STEP 以外に日本人（韓国人）と交流を深めたことがありますか。」との質問項

目を設けた。これに対しては参加者からは(a)の場合，本アンケート調査に回答してくれた人の全員から，興味・関心があるとの回答結果があった。更に(b)の場合，回答者の88%の人たちが既に何度か，相手国の人々との交流を経験していたことが明らかになった。I-STEP に参加する学生たちはほとんど，両国への興味・関心があり，既に交流の経験を持っている状況であった。

また，日韓関係についてのアンケート調査では，「現在の日韓関係についてどう思うか」について質問し，更に「I-STEP への参加動機，これからの期待等について」書面で記述してもらった。その結果，I-STEP2012 に参加した学生たちは，現在の日韓関係について 93%の人が普通以上の関係にあるとしている。しかし，現在の日韓関係が良いとは言えない状況についても記述している。書面での記述で回答を求めた「歴史・政治問題に関する意識」では大きな差が見られた。特に，慰安婦問題，教科書歪曲問題，竹島・独島問題などについての認識度は，韓国側がそれぞれ 100%の回答があったのに対して，日本側はどれも100%には及ばず，慰安婦問題に関しては日本側の回答率が韓国側の回答率の半数以下となっていた。

【結果２】

結果２は，本研究の最終年度で実施した調査内容であり，一つは 14 冊の報告書から読み取られた参加者たちの意見をカテゴリ別に分析して明らかにしたものである。

その一例として，長崎の学生が韓国を訪れて感じたことをカテゴリ別に抽出した。その結果，「活動全体」，「授業」，「文化活動」などのカテゴリに分類することができた。活動全体に関する所感から，本活動を通して満足感や学習意欲の向上，異文化交流への自信などを得ることが示された。一方，自分自身の語学力の低さへの反省と今後の学習意欲に対する抱負などに関する記述が多くの参加者のコメントから抽出された。また，授業を参観および実践した所感からは，言語学習や ICT 活用などに対する日韓の教育体制の差異について言及されていた。さらに，日韓での教育現場における現状の違いに気づき，現地で即興的に授業案を修正している様子が読み取れた。文化活動に関する所感からは，異文化交流による新たな気づきや，広い視野で物事を考察するための足がかりを得るなど，自己成長についての記述があった。

もう一つは I-STEP 参加者で，現在は学校の教員として勤めている人々へのインタビュー調査の結果である。その内容は以下の通りである。

●主な質問項目

１．10 年前の I-STEP で記憶に残っていることはなにか

２．報告書を読み直して思うことはなにか

３．異文化の状況下で授業を計画，実行することをどのように考えるか

４．I-STEP での経験が現在の教職においてどのように生かされているか

５．I-STEP の取り組みをどのように評価するか

以上の質問項目に対して，インタビューの結果は以下の通りである。

●結果（抜粋）

１．韓国の学生は将来について自分達よりもしっかりと考えていた。

２．教育実習前に違う国や文化の中で教員を目指す学生の姿はとても刺激になった。

３．中学校の授業を参観し，英語の授業の高度さに驚いた。また，電子黒板等の ICT の活用に関しても先端的であると感じた。

４．現在，教員として担当しているほとんどの児童は海外での経験がなく，日常的な会話や社会科において I-STEP での経験を語ることが多い。そこにはメディアが報じる韓国の姿ではなく，実際に自分自身が関わって感じたことを伝えるようにしている。

５．言葉が通じない中での授業では，視覚的なものが有効であった。

６．I-STEP の取り組みについては，行く機会があればまた参加したい。現在であれば，当時よりももっと現場についての理解ができると考えられる。

７．10 日間での関わりであったが，当時出会った学生とは現在でも SNS 等で継続的な繋がりを持っている。

以上から，I-STEP の効果は高く，今後の継続課題として十分な価値があることが明らかである。

教員養成系大学の国際教育実習プログラム I-STEP は，2004 年 7 月から日本の長崎大学と韓国の漢陽大学校との間で行われた先駆的な取り組みである。本報告からもわかるように，このプログラムは初期の講義中心から現在の実習中心にカリキュラムの変遷を遂げている。また，海外の学校現場や子どもたちに触れたい教員養成系大学の学生たちにとって満足度の高いプログラムであることが分かる。

更に，2012 年度に実施された学生主体のアンケート結果から，多文化共生，異文化理解を目的とする異国間の学生交流の直接的な関わり合いや交流が極めて重要であることが示された。また，本研究の最終年度に実施された報告書のカテゴリ分類，また，現職教員へのインタビュー調査から，言葉の壁なども相手と時間を共に過ごし，直接関わり合いを持って，積極的に自分の意思を伝え，また相手の意見を聞き，お互いを理解していくことで，確実に歩み寄っていくことができることを示している。また，日韓関係に関するマスコミの報道や書籍や周囲から入ってくる情報は発信者の意図によって着色されている部分が大きく，受けてきた教育によっても

相手に対する認識に大きく影響を与えていることがこれらの調査結果から容易に読み取ることができた。

最後に，本研究の最後の報告として，日韓の研究者達が合同でラウンドテーブルを設けて発表することができた。場所は韓国のソウル大学校・Hoam 教授会館であり，関連学会は韓国・多文化教育学会が主催した国際多文化教育学会，論文発表会（Envisioning New Possibilities of Multicultural Education, 2016 KAME International Conference）であった。

＜引用文献＞

①長崎大学教育学部・漢陽大学校師範大学交流プログラム I-STEP(2004～2015),全14冊,長崎大学教育学部・平和と多文化共生に関する研究センター。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① Norio Setozaki, Yusuke Fujii, Ken Kusuyama and Byungdug Jun：A Study for the Impressions of I-STEP ’s Participants and Interview Survey, KAME International Conference，査読無し，pp. 93-794, 2016.5.

②Yudai Sato and Byungdug Jun：Awareness Comparison with Japanese and Korean in Junior High School 。2016 Joint International Symposium of GISUP-KOGSIS。査読無し，pp. 273-278。2016.2.

③Anna Shimoda and Byungdug Jun：Application of Peace Education for ESD。査読無し，GISUP 2014, International。 pp. 27-31。2014.2.

④全　炳徳，下田杏奈：日韓の大学生による海外教育実習プログラム I-STEP と参加学生の意識調査。長崎大学教育学部紀要-教育科学-。77 号。査読無し，pp. 87-94，2013.3.

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）：無し

○取得状況（計０件）：無し

〔その他〕

ホームページ等：無し

６．研究組織

(1)研究代表者

全　炳徳（JUN, Byungdug）

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号：10264201

(2)研究分担者

楠山　研（KUSUYAMA, Ken）

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：20452328